



蔵王の樹氷原ジオラマ

## 聴 耳

館長 古沢 平太郎

博物館で働くようになって、探鳥会に行ったときのことを思い出しています。目の前にひろがる山脈を眺めながら、案内者は林から聞える鳥の声をとらえて、つぎつぎと鳥の名前をあげられたのです。私の耳にはどうしても聞こえない鳥の言葉を聞き分けられる超能力に感嘆せざるを得ませんでした。風や雲の動きをいち早く察知する観天望気の技術ももっておられるようで、大自然とのこまやかな交わりには深く心を動かされたのです。草木虫魚の世界に仲間入りするには、人間は余りにも退化してしまっているのかもしれませんが、この方のようにじっと聴耳を立てることを忘れてはならないように思うのです。

当博物館は、常設展のほか、「鳥海山 火・花・神」の特別展、「縄文のタイムカプセル—押出遺跡、野鳥展、おしば展、新収藏品展」などの企画展、生態学と郷土と歴史講座などのほか、さまざまな行事を中心に今年度事業を企画しておりますが、要するに、県民の幅広い要望に「もの」で対応し、その「もの」がもっている潜在的な価値を

明らかにして、「ひと」に結びつけていく機関であります。教育資料館にしても、琵琶沼にあります附属自然学習園にしても同じことがいえます。自然や歴史、教育についての情報サービスセンターとしての役割を果たすためにどうあればよいか、絶えず吟味してかからなければならないのも当然です。そのときに、それぞれの「もの」が発する音が聞きとり易いように図っていかなければならないのです。

このたび、新常設展示として、蔵王樹氷原のジオラマを加えました。さらに、電光解説パネル等を用いて、樹氷のできるわけをお分りいただけるようにしたいと考えています。

市のおはからいで、旧山形城の「二の丸東大手門」の復元工事がヒノキの香新しく完成し、本館の入館者の数も増えております。

聴耳をそば立てて、入館なさる県民の方々の期待に応えられるよう一層努めてまいります。皆さまのご来館をお待ちしております。

## 企画展

## 縄文のタイムカプセル —押出遺跡—

期間 4月27日(土)～6月23日(日)

近年、県内では開発等にもなつて、多くの埋蔵文化財の調査が実施されています。これらの膨大な成果を、県教育庁文化課と協同して県民に公開し、むかしの人びとの暮らしを考えながら、埋蔵文化財の持つ意義を理解してもらおうとするもので、この度は、その豊富な出土資料によって縄文時代のタイムカプセルともいわれる高畠町押出遺跡を取り上げました。

押出遺跡は、白竜湖畔の低湿地に営まれた縄文時代前期のムラで、発掘調査の結果、国の保有となった彩文土器を初め、縄文クッキーや打ち込み柱の平地式住居跡など、それまでの常識を覆すようなさまざまな資料が発見されました。

これらの資料をもとに、縄文人の豊かな生活を考えようとするものです。



縄文クッキー

## ◇展示テーマと概要

## (1) 湖畔のムラ (プロローグ)

米沢盆地の東北端に大谷地と呼ばれる低湿地帯があります。この北縁近くにある白竜湖は、現在は径300メートル程の小さな湖沼ですが、昔はもっと広大な湿地帯を形成していました。約五千年前頃、白竜湖を中心とした湿地帯が大谷地に点々と広がっており、人びとは微高地を選んで住居を構え、生活を営んでいました。

地表下約2メートルの地中に、沢山の遺物や住居の跡が水漬けにされて、腐ることなく保存されていた押出遺跡は、まさに縄文人が残した「タイムカプセル」といえます。

## (2) 自然の恵み

木ノ実や獣が豊富な山、魚が棲み水鳥が群れる水辺、これらの自然の恵みに囲まれて、押出の人びとはムラを営んでいました。

いろいろな植物や動物が彼らの食卓を賑わしたに違いありません。500キロカロリーもの栄養価を

もった縄文クッキーなどから、四季を通じてバランスのとれた食生活がうかがわれます。

そのような自然の恵みも、常に一定であるとは限りません。より多い収穫を祈って山や湖の祖霊に捧げたとも考えられる石棒や異形石器などから、押出の人びとの心の動きが見えてきそうです。

## (3) 漆と器と

押出遺跡からは、高台の付く大杯に代表される木胎漆器や「彩文土器」と名付けられた漆を塗った土器、あるいは漆塗の櫛、さらには器の底に溜った漆の塊など、漆を使った器が多く発見されています。

今日、磁器を「チャイナ」と呼ぶのに対して、「ジャパン」といえば漆器を意味するほど日本の漆工芸は世界で高く評価されていますが、この頃から始まった漆の利用は、今日の日本の漆工芸の、いわば出発点ともいえます。

これらの漆塗りの土器や大杯などから、余暇を利用して漆塗りにいそむ押出の人びとの、豊かな生活のようすがうかがえます。

## (4) 縄文人の交流

押出遺跡から出土する縄文土器は、山形を含めた東北半部に分布する大木式の土器群が主体となっていますが、そのほか東関東地方に分布の中心を持つ浮島式の土器群、関東地方から中部地方にかけて分布する諸磯式の土器群などで構成されています。

その頃の米沢盆地はブナ林やナラ林などを中心とした落葉広葉樹林帯に含まれており、関東地方はそれより暖かい、タブノキやヤブツバキなどの生育する照葉樹林帯に位置していました。これらの土器から、落葉広葉樹林で育まれた生活文化に、北上した照葉樹林の文化が大きく影響を及ぼし、融合・発展した様子が見えます。また、福井県鳥浜貝塚からは、彩文土器とよく似た文様を施した漆塗りの土器が出土しており、両者の間には、直接か間接かは別にしても、なんらかの関連があったと考えられます。

縄文時代といえば、私たちはとくムラの近辺を移動するだけと思いがちですが、このように見ると、縄文時代の人びとは、私たちが考える以上に広い範囲で交流を行っていたことがわかります。

## 資料紹介

## チドリ科・シギ科の鳥

チドリ目・チドリ科の鳥は、世界で約60種ほどおり、日本では12種が知られ、うち5種が繁殖しています。山形県内では8種記録があり、うち、コチドリ・シロチドリ・イカルチドリ・ケリの4種が繁殖しています。あとのメダイチドリ・ムナグロ・ダイセン・タゲリは旅鳥か冬鳥として見られます。

チドリ類は、よく似たシギ類と比較するとくちばしは比較的短くて、頭部や目が大きいのが特徴です。シギ類のように木の枝にとまるというのではなく、頭を下げたまま餌をとり続けるシギ類とは違い、すばやく歩きまわって立ちどまって餌をとるといった動作をくりかえします。

## ○コチドリ

夏鳥として渡ってきますが、チドリ類中最も小さい種類です。最上川の中流、下流の中州や川原、河口の砂浜などに生息し、川原の小石や砂の上に浅いくぼみをつくり巣としています。

## ○イカルチドリ

コチドリに似ていますが、一まわり大きくて、くちばしも比較的長めです。

大井沢、松川、立谷川、馬見ヶ崎川上流など山間地で河川の上流部に多く生息しています。巣はコチドリと同じようにつくります。

## ○ケリ

チドリ類中最も大きくて、名前の由来となったと思われるキキッまたはケリッと聞える鋭い声で鳴きます。沼地のへり、水田、河原などで繁殖しています。日本全体では留鳥ですが、山形県では夏鳥です。尾花沢市、南陽市、長井市、飯豊町などで繁殖の記録があります。



チドリ科 ケリ

チドリ目・シギ科の鳥は種類が多く、世界で約80種知られていますが、ほとんどの種は北半球の北部で繁殖し、長距離の渡りをして熱帯地方や南半球で越冬するのが普通です。日本では50種ほど記録されていますが、繁殖するものは多くありません。また、国内で越冬する種類も少なく、渡りの途中春・秋に立ち寄るだけの旅鳥が大部分です。

山形県内では海岸線に干潟がほとんどないということもあってシギ類の渡りは少なく、30種近くが確認されているにすぎません。県内で繁殖しているのはイソシギ・ヤマシギなどだけです。

シギ類は大きさや形も変化に富み、小型種から大型種まであり、くちばしや脚の長さ、形なども大きな違いがあります。また、夏羽と冬羽で色彩が変わるものが多いのも特徴です。

## ○イソシギ

県内で繁殖しているイソシギはムクドリより少し小さいぐらいの大きさで、背面は灰色っぽいかった色、下面は白色でスマートな鳥です。

セキレイのように尾を上下によく振る種類で、山形県では夏鳥です。最上川流域やその支流の川原に多く生息しています。

## ○ヤマシギ

ヤマシギは太った大型のシギで、普通は山地の広葉樹林内で繁殖し、夕方ごろから活動する機会が多くミミズや昆虫類などを餌としています。樹林の間もたくみに飛ぶことができるといわれ、庄内浜の松林や飛島などでも繁殖が確認されています。山形県では夏鳥ですが数は多くありません。

ほかに目立つ種類としてはトウネン・ハマシギ・キアシシギがおり、渡りのときには群れで見られます。タシギは2、3羽の小さな群れで見ることが多く、県内で越冬しているものもいます。

(奥山 武夫)



シギ科 ヤマシギ

## 資料紹介 山形県教育委員選挙用の投票用紙と選挙公報

日本の教育委員会の制度が、国民の選挙によって選ばれる直接公選の民選制から始まったことを知っている人は現在のどのくらいいるのでしょうか。こうして話題にとりあげれば、ああそうだったとすなずく人はいるのでしょうか、忘れてしまっている人の方が多いのではないのでしょうか。今後は更に、夢にも知らなかったという人の方がふえることでしょう。教育問題が社会問題として大きく取り上げられる昨今、敗戦直後の民主主義・自由主義を謳歌した時代の、新教育の理念をこういったところから見なおしてみる必要があります。そういった意味で貴重な資料をとりあげてみます。

今回紹介する資料はその民選選挙を実証する山形県の教育委員選挙のための投票用紙と選挙公報です。

投票用紙は和紙で、縦10センチ、横13センチの大きさのものです。書式は現在の市・県・国会議員の選挙用紙と同じですが折畳式にはなっていません。もちろん投票済みのものなので候補者の名がそれぞれに書いてあります。この名前を調べることによって、これが昭和25年11月10日に行われた第二回目の山形県教育委員の改選用の投票用紙であることがわかりました。この時期の教育委員は四年任期の委員と二年任期の委員がおり、その後者の改選用です。全部で1860枚あり、立候補者ごとに赤い紙テープでくくり、普通の紙箱（蓋なし）に入れて新聞紙に包んでありました。どこか規模の小さな投票所のものが集計後の処分の際にながれたものと推定されます。

このときの立候補者は定員3名に対して6名でした。当選者の完戸（ししど）一郎・田中せき・梅津金吉のほか、斎藤国丸・五十嵐正治・大野敏英がたったのですが、この中で第一回目に引き続



いての当選者は田中せき一人でした。第一回目の選挙の時は占領軍の指導が強すぎて、立候補希望者が辞退させられたようなこともあり、批判・不満があったため、この二回目の選挙は本当に民意を反映するものになると期待されていたようです。この選挙の結果、前回に立候補を辞退させられた候補者が一位当選し、この3人の当選者に前期から任期が継続する四年委員と県議会互選の1名を加えて第二期の山形県教育委員会が発足しました。

教育委員会の制度は戦後の民主教育改革がもたらしたものです。もともと戦前・戦中の日本の教育行政には民間の意見の入る余地はなく、特に戦中はすべて国策によるものでした。戦後、アメリカ占領軍の指導のもとに、昭和27年11月1日に各地域の人々による直接公選制が実施され、県および市町村教育委員会が発足しました。その後は財政面その他の点で問題が多く、公選制度への批判が強くなり、昭和31年10月には地方公共団体の長による任命制に変わりました。当時の社会事情や教育状況についてはいろいろ書き残されていますが、特に教育関係では佐藤源治著「占領下の山形県教育史」（昭和55年刊）がこの時期の山形県の状況を詳しく記録しています。

この投票用紙を一枚一枚みてゆくと、はじめて耳にする「教育委員」なるものを選ぶ権利を与えられた当時の人々のとまどいが感じられます。カタカナ書きのもの、ひらがなだけや当字だらけのもの、墨書、ペン字、鉛筆書きなどがあります。また完戸（ししど）一郎の名を「一口」などと漢数字の一と片仮名のロを組合せて書いたものなどいろいろな書き方をして投票しているのですが、どの字も一生懸命書いているようにみえてきます。

選挙公報の方はタブロイド版一頁の一枚もので、

6人の立候補者の公約が印刷されています。候補者の写真はありません。この公報には投票用紙になかった選挙執行日と何のための選挙であるかが明記されています。紙質も印刷も悪く戦後の物不足の様子を知ることができます。またそれぞれの公約の内容から当時のひとびとが教育に求めているものがわかり、現代の教育観との比較をすることができます。別々に収納された資料ですが、たまたま同じ第二回山形県教育委員選挙用のものが揃い、資料価値をたかめています。（佐藤 陽子）

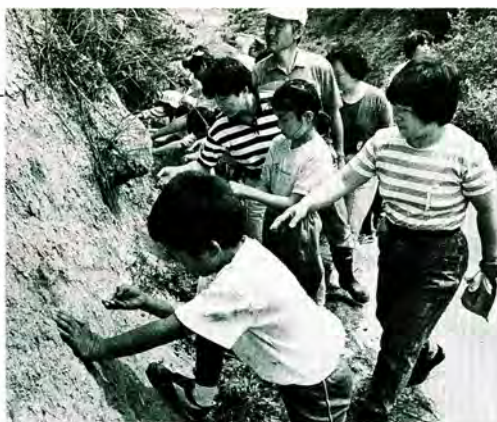
# いんぷおめ～しよん

## ■ 親子博物館教室のご案内

本年度の教室は、下記のとおり山形県飯豊少年自然の家を会場として、1泊2日の日程で実施します。

〈記〉

1. 対象 小学生と保護者
2. と き 平成3年6月8日(土)～9日(日)
3. と ころ 山形県飯豊少年自然の家  
(飯豊町、TEL 0238-74-2331)
4. 定 員 親子120名  
(地学班40名・昆虫班40名・植物班40名)
5. 費 用 1人 1,500円(当日集めます)
6. 申し込み 児童と保護者の氏名・性別・年齢・住所・電話番号および児童の小学校・学年と希望の班を書いて、博物館まで郵送(電話も可)



地学班の活動(平成2年6月 大江町)

7. しめ切り 先着順で6月1日(土)まで
8. 服装・持ち物 野外活動のできる服装・洗面用具・鉛筆・雨具・水筒・軍手・リュックサックと、地学班はハンマー(金づち)・タガネ・新聞紙・ビニール袋、昆虫班は虫とり網・虫かご
9. 集 合 6月8日(土) 飯豊少年自然の家  
午後3時

## ■ 生態学講座のご案内

### 1. 趣 旨

身の回りを見わたして、ひと味違う自然を見つめてみようということで、昨年「自然再発見」のテーマを設定しています。

今年度は同テーマの2回目、特に雪と深いかわりあいをもつ最上地方の自然にスポットをあてます。一般の方々、どなたでも参加できます。

### 2. テーマ

「自然再発見・最上」

### 3. 開講日

演習を除き、今年度から金曜日に変更になりました。

## 夏休み自由研究の相談

小・中学生が取り組む夏休みの自由研究について、博物館では研究の「進め方」や「まとめかた」のアドバイスをおこなっています。今年度も下記の日程で相談に応じますので、どうぞご利用下さい。お待ちしております。

第1回目 7月25日(木)午前10時～午後4時  
〃研究の進め方について、

第2回目 8月16日(金)午前10時～午後4時  
〃研究のまとめかたについて、

演習については後に詳しく連絡します。  
申し込みは5月17日までとします。

日 時	会 場	内 容	講 師
6月7日(金) 午後2時～	本館講堂	山形の植物研究史	結城 嘉美 (元県立博物館長・本館嘱託)
6月21日(金) 午後2時～	本館講堂	山形の雪	沼野 夏生氏 (科技厅新庄雪氷防災研究支所雪氷防災第一研究室長)
7月5日(金) 午後2時～	本館講堂	最上地方の動・植物	大類 貞夫氏 (戸沢村立戸沢中学校長)
7月20・21日 (土・日)	花立峠周辺	〈演習〉 県境の山の動・植物 の交流	結城 嘉美 木俣 繁(本館嘱託) 奥山 武夫(本館副館長兼学芸課長) 長澤 一雄(本館学芸員) 竹村 健一(本館学芸員)
8月2日(金) 午後2時～	本館講堂	雪と樹木	小島 忠三郎氏 (元農水省林業試験場山形分場長)

# あ・ら・か・る・と

## ◆ 蔵王の樹氷原ジオラマ完成

ジオラマ (Diorama) とは、ある情景を実物大模型と背景パネル等の構成によって、臨場感あふれる姿で再現する展示方法 (実景展示) です。

このジオラマの展示計画は、平成元年の秋より始まり、様々なプランが練られ、現地調査にもとづいて進められてきました。実際の模型の製作は、東京の展示業者に委託し、山形大学の矢野勝俊助教授の監修によって、平成2年12月より始まり、平成3年3月に、本館の1階ホールに完成しました。

その製作は、次のような工程をたどりしました。  
1) 木組みと金網ネットで樹氷の外形をつくる。2) その外形にそって、FRP樹脂によって型どりをする。3) FRPの型の表面に、硬質発泡ウレタン樹脂を厚く吹きつける。4) 樹氷表面のエビのしっぽの一つ一つの細かな表面構造を、ウレタン樹脂の削り込みによって造形する。5) パイル (軟毛) 塗装や雲母粉を付着させることで表面仕上げをする。6) 硬質発泡ウレタンの吹きつけによって、樹氷原の雪面造形を行う。

こうして、8体の樹氷が雪面に林立する姿に再現されました。最大のものは高さ4.4mで、いずれも表面には冬季の強い西風で形成される「エビのしっぽ」を無数にまとった力強い姿をしています。



樹氷模型の製作の様子

—— 樹氷一口メモ ——

樹氷は、東北地方の奥羽山脈の一部の山にしかできません。海外でもはっきりした報告はありません。限定された条件のもとでしかできないのです。まさに、自然が作りだした芸術品です。

## ◆ 博物館教室は



今神温泉、御池

戸沢村との共催で次の様なコースになる予定です。

- 県指定天然記念物 今熊の大スギ
  - 浄の滝
  - 今神温泉とブナに囲まれた御池
- 期日 10月6日(日)  
—— 詳しくは、次号の館ニュースで ——

## 職員のうごき

- 退職  
主任専門学芸員 加藤 稔  
学芸員 佐藤 陽子
- 転出  
館長 矢口 隆一 (天童高校長へ)
- 転入  
館長 古澤平太郎 (赤湯園芸高校長より)  
学芸主査 島貫 育子 (楯岡高校より)  
嘱託 佐藤 陽子
- 職名変更  
専門学芸員 菊地 和博 (学芸員より)

## ◆ 資料寄贈者紹介 (敬称略)

- 〈教育〉  
鈴木栄三 (山形市) 教育学辞典 他41点  
田中新治 (〃) 戦後教科書 他28点  
伊藤武郎 (東京都) 「山びこ学校」16mmフィルム 1点  
三沢英夫 (〃) 江戸、明治期教科書 122点
- 〈歴史〉  
新野昌生 (宇治市) 秋元吉順兵学文書 16点
- 〈民族〉  
石川清治 (河北町) ワラ製「羊」玩具 1点
- 〈地学〉  
小鹿定久 (山形市) 貝類化石 2点
- ありがとうございます。 ——

山形県立博物館ニュース 第107号

平成3年5月31日発行

山形県立博物館

〒990 山形市霞城町1番8号

TEL 0236 (45) 1111

山形県立博物館教育資料館

〒990 山形市緑町二丁目2番8号

TEL 0236 (42) 4397